

# 日本中世文学における十三世紀後末期東山白毫院・靈山周辺

——書物ネットワークの視点から——

牧 野 和 夫

本稿は、二〇一〇年八月二〇日に行ったIAHRト  
ロント大会（於トロント大学）での発表原稿日本語版  
に、若干の補記と一、二の資料を加えたものである。

## 問題の設定

英文要旨は大会発表論文集に掲載、英文原稿（日本語  
版と異なる部分が少なくない）は成菩提院調査報告書  
に全文掲載予定である。時間厳守のこともあり、簡単  
な記述に終わったが、一部分は文学作品の側から捉え  
直した近刊の「延慶本『平家物語』の天狗」（竹林舎  
刊）に詳述した。ご参照頂ければ、幸いである。なお、  
以上の発表・論文は、二〇〇八年八月三一日に行った  
伝承文学研究会大会（於キャンパスプラザ京都）にお  
ける発表「中世文学史の一隅―慶政（円海）の周辺を  
軸に―」の一部を発展させたものでもある。

柏原談義所（学問寺）に現存する蔵書群の調査は、いく  
たの歴史の変転を蒙った「現在」という重い制約下に置か  
れている。貞舜・慶舜の活動以前の活発な中世の活動を、  
そこに窺うことのできる典籍は少ないが、近時の調査<sup>注1</sup>を、  
よって室町初期頃の柏原成菩提院の蔵書形成を考えるに際  
して、湖東の金剛輪寺や洛西寺戸の宝菩提院（仏華林）と  
の典籍移動の姿が浮き彫りになってきた。更にこの両寺院  
における学僧・典籍の頻繁な交流は、貞舜・慶舜以前の鎌  
倉時代後末期の「東山交流圏（小川・白毫院・靈山・安居  
院・金山院ほか）」と呼ぶべき学問的な交流の渦をおぼる

げながら窺知する手がかりを与えてくれることになった。

近年、解明した既紹介の断簡三葉の周辺を軸に、一、二を加え推測し、可能性に言及したい。

一 穴太西山流と典籍通蔵の問題——『宝秘記』断簡と『阿婆嚩抄』の通蔵について——

二 白毫院（太子堂）の問題——良舎（白毫院円光上人）・澄豪（西山上人）・遍融（東山上人）のこと——

付 東山靈山の周辺——遍融・定円・清誉、宋人参画の出版事業——

### 一 穴太西山流と典籍通蔵の問題

——『宝秘記』断簡と『阿婆嚩抄』の通蔵について——

<sup>注2</sup> 近年、解明した既紹介の断簡三葉とは、川瀬一馬氏が紹介（書誌情報並びに紙背記の説話の全文翻刻と表の述記の部分翻刻）された断簡三葉（一卷に改装）である。表面に記された聖教の一部分は、園城寺蔵『宝秘記』第二十四冊の一節に該当し、閑居の友編纂の一資料は、その紙背記に<sup>注3</sup> 当たる。

下坂守氏の解明事実<sup>注4</sup>と併せて記述する。

①三井寺本『宝秘記』は安政四年（一八五七）頃に書写さ

れたが、底本は金剛輪寺明寿院の蔵本。

②金剛輪寺本『宝秘記』は十三世紀頃の書写、糊継ぎが離れバラバラとなり、仮に継いだ卷子本であったこと

③金剛輪寺本『宝秘記』は円海なる三井寺僧侶によって令写蒐集されたものと同僧の書写したものが混在するものであったらしいこと

④川瀬氏紹介の断簡三葉は、この三井寺蔵写本が底本にした金剛輪寺本そのものの断簡であること

九条道家の意向の許に編纂されている『宝秘記』（道家が慶政を介して進めた“宗教構想”へ<sup>注5</sup>展開）は、『昭和現存天台書籍綜合目録』による曼殊院蔵の古写本が知られていた。この曼殊院蔵の古写本が金剛輪寺蔵本そのものであり、「金剛輪寺—曼殊院—川瀬氏披見断簡」という通蔵の流れが想定できる。

<sup>注6</sup> 宮島新一氏に拠れば、『阿婆嚩抄』の通蔵の流れが、やはり「金剛輪寺—曼殊院」なのである。見返しに「金剛輪寺灌頂堂」という墨書のある曼殊院蔵『阿婆嚩抄』の「金灌記末」などがあり、見返しの大半には「貞享五戊辰（一六八八）某月某日修復畢 金剛佛子光海」という光海の修理墨書と「光海」の朱文鼎印が捺されている。光海は享保十三年（一七二八）に示寂した金剛輪寺歴代住職の一人である。この光海の代に金剛輪寺は日光輪王寺の末寺から曼

殊院の末寺に改められた。曼殊院本『阿婆嚩抄』は貞享五年以降に金剛輪寺から伝来したものであるが、『宝秘記』と同様に安政四年（一八五七）頃以降に転蔵された可能性もある。また、柏原成菩提院蔵の『阿婆嚩抄』のうち、豪鎮書写・令写校合の古い写本群は、曼殊院蔵本・京都の三千院円融蔵本と一具のものではなかったか、とする見解もある。曼殊院蔵本は成菩提院再興の時期・貞舜入院以降に金剛輪寺乃至西山宝菩提院から齋されたもので、曼殊院末寺に改まった近世後末期以降の金剛輪寺から伝来したか、と考えられる<sup>注7</sup>。

一方、曼殊院蔵『阿婆嚩抄』が金剛輪寺に施入された時期は確定し難い。書写年代の遅い『阿婆嚩抄』は貞和二年（二三四六）には金剛輪寺に施入されていた。元弘三年（二二三三）以前に金剛輪寺に入っていたものと推定できるものもある。曼殊院蔵金剛輪寺旧蔵『宝秘記』も、時期を推定する手がかりはないが、そのラインを経由した可能性はある。

穴太小川・西山流の歴代「承澄—澄豪—豪鎮」以下の穴太西山流の学僧、とりわけ鎌倉時代後期の澄豪の事績が留意される（ちなみに、近時、縦15糎内外、横12糎内外の柀型本の『阿婆嚩抄』（文明頃写）を披見した。『阿婆嚩抄』の一帖が柀型という形態の系統に位置することの意味につ

いては、今後の課題でもある）。

二 白毫院（太子堂）の問題—良含（白毫院円光上人）・澄豪（西山上人）・遍融（東山上人）のこと—

付 東山靈山の周辺—遍融・定円・清誉、宋人参面の出版事業—

近年、明らかにされてきた澄豪の顕著な事績として白毫院（太子堂）における書写・伝授行為がある<sup>注8</sup>。「弘安六年（1283）9・17 於白毫院 良含記『陀納深密口決西勝』書写（澄豪）」から「永仁二年（1294）10 於白毫院 行遍、白毫院御座之白毫院御座之白毫院御座之西山上人時面授（受）口決」などに至る書写奥書類で確認できる。とくに白毫院円光上人良含との面授は看過し得ない。

承澄、あるいはその弟子澄尊の撰述とも言われる『阿婆嚩抄』の撰述奥書を適宜拾い、更に澄豪・良含（遍融・円海・秀範などは必要事項のみ摘記）の事績を蒐集し、建治以降正安から文保頃までの白毫院に関する年表を一覧する。とくに注記のない場合は、承澄が主体である。阿は『阿婆嚩抄』の簡称。

寛元三年（1245）2・27 於小川 阿『七仏葉師』草

了

建長三年 (1251) 於小河 『神供作法取水』草了

(略)

建治三年 (1277) 5・27 『一二三名目』書写

建治三年 (1277) 初冬候 阿『隋行私記』抄記之畢

建治四年 (1278) 1・1 阿『許可』書写了

①弘安二年 (1279) 2・9 『悉曇灌頂私記』記之

良含

参考：弘安二(三)年 (1279) (80) 3・3 阿

『悉地記』書了

②弘安三年 (1280) 12・13 『悉曇灌頂私記』阿字不

生灌頂私記」[当用之間私記之 良含]

③弘安四年 (1281) 6・11 阿『合行』書改了

④弘安四年 (1281) 6・11 阿『四種念誦事』書改之

了

⑤弘安四年 (1281) 7・15 阿『金灌記』書写

⑥弘安四年 (1281) 7・18七十七 法華玄義卷一書写

(版下)

⑦弘安五年 (1282) 七十八 法華玄義卷二

書写 (版下)

⑧弘安六年 (1283) 5・24 於白毫院 『題未詳』

(不完聖教二・2678) 「賜之写了 遍」(融)

⑨弘安六年 (1283) 6 法華玄義卷五書写(了覺)・

法印權大僧都 □□(忠源)

⑩弘安六年 (1283) 9・17 於白毫院 良含記『陀納

深密口決西勝』書写(澄豪)

⑪弘安六年 (1283) 阿『胎曼枳』写了(書写者不

詳)

⑫弘安八年 (1285) 4・30 『法華文句記』卷八本

「弘安八年四月三十日 始從一位良教卿筆 終宋了一統

筆」

⑬弘安八年 (1285) 6・3 於白毫院? 『題未詳』

(不完聖教二・2696) 「賜之 遍」(融) (生年四十

七)

⑭弘安九年 (1286) 1・25 於九條殿 理真より良含、

『書写山真言書』書写、某月・18伝受

⑮正応二年 (1289) 1・23 於白毫院? 良含より澄豪、

『書写山真言書』書写、2・1伝受<sup>注9</sup>

⑯永仁二年 (1294) 10 於白毫院 行遍、西山上人白

毫院御座之時面授(受) 口決

⑰正安元年 (1299) 6・28 於白毫院? 寂仙上人遍融、

円海上人に『造作如意宝日記(造作井金台同事)』を授

ける。

⑱文保元年 (1317) 6・15 於東山旅室 秀範、「理

趣醒聞鈔」を書写

⑱文保元年（1317）6・18 於東山靈山幽室 秀範、  
題未詳を書写

⑳文保元年（1317）8・2 於東山 秀範、  
の口授により「尊勝院流印信」を書写

かくて、弘安四・五年最晩年の小川承澄は『阿娑嚩抄』  
の「書改」などに関わり、刊行予定の『法華玄義』巻一の  
版下を書き終えて没する。以降、弘安六年より承澄膝下の  
良舎・澄豪を軸にして遍融・円海などの「伝受授」の場と  
して律院化後の白毫院が、俄然、クローズアップされるに  
至った。正安元年頃までの一五、六年間の白毫院における  
交渉によって齎らされた文物、とくに典籍類が、澄豪や行  
遍などを介しておそらく穴太西山流へ継承され、主として  
西山佛華林などへ転じ、さらには金剛輪寺や柏原成菩提院  
に蓄えられ、近世後末期以降に至りそれらの一部が曼殊院  
へ通蔵されることになった、と考える。近時発見された金  
剛輪寺蔵『観音玄義科』一卷は、その最たるものであろう。<sup>注10</sup>  
円海の関与した『宝秘記』も白毫院経由を視野に入れるべ  
きであろう。

また、かつて牧野「中世天台談義所の典籍受容に関する  
考察」（『延暦寺と中世社会』二〇〇四・六 法蔵館）に  
おいて駿河智満寺旧蔵典籍類の通蔵の問題を扱ったが、近

時、次のような聖教を知ることができたので紹介する。

馬淵和夫氏『影印注釈 悉曇学書選集』第二卷（昭和  
63・2 勉誠社）に収載された筑波大学図書館蔵天福二年  
写『悉曇要決』（十・二一・1）粘葉四帖である（平成二  
十二年度の筑波大学図書館の館内展示品に、「成菩提院」  
旧蔵の当該書のあることを、御教示頂いた山澤学氏に深謝  
申し上げる）。馬淵氏解題を引用する。

〔卷一奥書〕

一交畢

重合点了

書本治承五年辛丑二月廿四日越州坂北於豊原寺書之 梵  
字二字

天福二年甲午七月十七日智法寺別処於興禪院書了 小比  
丘信毫

今心俊相伝之処也

仏本行集経中太子入学堂時只唱阿伊優 鳴五字迦等三十  
四字故知 五音為十二者也

書本二錐有之入処ヲ

不知也云云

一見了

（卷二奥書）

天福二年甲午七月廿四日寓走湯寺別処興禪院書了 小比  
丘信毫 後日重交合了

(卷三奥書)

心俊相伝之処

天福二年甲午七月四日於興禪院書了信毫

一交畢重交合了」

(卷四奥書)

天福二年甲午八月四日於□□寺別処興禪院書了 仁尊

同六日交合了信毫

書本云治承五年歲次辛丑三月廿六日越州坂北豊原寺修行

之書之了 梵字二字

この奥書により、天福二年(一二三四)に信豪なる者が、治承五年(一一八二)孔(ごう)平鍵(範)か)なる者が写した本を書写し、これを手沢本としていた。これを「成菩提院」の「心俊」が伝授されたこととなる。既述のごとく、心俊は『悉曇要集記』文暦二年本の所持者でもあった。」

さらに、『悉曇学書選集』第二卷には、馬淵氏藏文暦二年写『悉曇要集記』(十・一六・一六)粘葉一帖が紹介され「奥書」も以下の通りである。

「文暦二年乙未正月十五日未尅書了

執筆小比丘道義房静明生年廿九歳也

以五本交合文極悪也」

書誌情報として表紙左下に「成菩提院」「心俊」とあること、第一丁第一行下方に「小汀文庫」の二重匡廓朱印、卷末に「小汀文庫」の単廓朱印のあることなどにふれ、「成菩提院」は本選集所収の筑波大学附属図書館蔵『悉曇要決』の表紙に書記されたものと同筆である。またその奥書中に該本の相伝者として心俊の名が見えるから、この『悉曇要集記』は『悉曇要決』と一緒に成菩提院所住の心俊なる者の手許にあったことがわかる。ただし、成菩提院、心俊については未詳。」(頁4)とされた。

悉曇関係のこの両書は、正に「走湯」(伊豆)と「智満寺」(私に「満」とよむ)とを結ぶ、天福二年頃の「信豪」「信毫」の手に係るものであり、成菩提院現蔵『蘇悉地对受記』一帖ほかと同筆者に係る悉曇書群であったことが確認できたのである。「走湯」(伊豆。重書き、下字不明)と「智満寺」(擦りけち)の両寺における相互授受ということで金澤文庫保管『忍空授銀阿状』の「安貞二年七月廿日於伊州走湯山来迎院授与駿州智満寺住僧堯真」と同じ流れが認められる。「信毫」も、金沢文庫資料に、伊豆淨蓮などと名を列ねる「信毫」その人の可能性が生じている。今後の課題)。悉曇学の領域を考慮すると承澄、良含(円光上人)、澄豪(さらには岩藏大円上人が傍系として考

慮される)などが「白毫院」「成菩提院」周辺に浮かぶが、思融(円珠)や忍空を介すれば戒壇院・法華寺系とも関連する。詳細な書誌情報などを含めて今後の課題である。

ほかに良含関係で一点の紹介があるので、引用する。

東寺観智院藏『悉曇字記聞書』(信範撰)(八・八・3)である。第一冊の奥書に、

「観心三年六月廿八日賜大柳御本於河東妙法院御前六帖内五一帖書写終畢 祐禪

此是明了房信範上人抄也云云

御本奥云 以白毫院上人御本校合畢

八月十三日校合畢

とある、と。「白毫院」については、『阿婆縛三国明匠略記』(続群書類従巻第二百二)の巻首の「私云。取要抄出畢。為御抄披見時也。此略記。白毫院円光上人御類畏(集のあやまりか)也。」に従い、「天台の小川流とも関係が深かったこと」「白毫院上人」は円光のことか。(頁10)とされた。

以上の詳細は近刊予定の別稿「延慶本『平家物語』の天狗」(竹林舎刊)参照。

## 付 東山靈山の周辺 — 遍融・定円・清誉

『題未詳(不完聖教三 2721)』の奥書「永仁三年閏二月廿三日、於仁和寺成就院/以東山寂—(仙)上人御本奉書写了/金剛來佛子 定徹」とあるように遍融は、永仁三年(1295)には「東山」を冠しており、光宗撰『溪嵐拾葉集』「縁起」に登場する徳治年中(一三〇六—八)の「靈山院ノ寂仙上人」と考え合わせるならば、永仁三年以前に「東山靈山院・白毫院」を拠点にした学僧と考えられる。『天狗草紙(七天狗絵詞)』の撰者に比定される僧侶であるが、永仁三年以前文永頃に「東山靈山院」を拠点に活動していた学僧では三井寺の定円が有名である。定円は反御子左派の父真観没後の歌書群を伝領し、三井寺僧清誉とともに東山靈山あたりで素寂(源光行を父、親行を兄)を中心にして書写・校定作業に勤めた事績が近年あきらかに<sup>注11</sup>なったが、仏事法会の式文に<sup>注12</sup>学才を揮い安居院澄憲と双壁と讃えられたことは知られていた。靈山院には文永以降も継続されたと思われる歌書・歌論書の蓄積があった、と予想される。遍融の頃の靈山院は正に「天狗」と「歌論」が交差する「場」でもあったのである。『野守鏡』の撰述の時期が永仁頃であるならば、看過しがたいエリアで

もあった。前節の白毫院に関する年表に見る如く円海の資秀範も霊山での書写活動が知られる。文保元年の書写は円海の口授によつての「書写」なのである。

弘安六年以降十数年の間、白毫院を軸に活動していた良含・澄豪・遍融の動きは、承澄晩年の頃から弘安八年にかけて天台三大部並注疏記の刊刻事業に願主・本文書写（版下）として集結した学僧などの人脈に連なる点は興味深い（これらの詳細は平成23年3月中に発表予定。なお増田欣

氏『中世文芸比較文学論考』（汲古書院 2002）参照）。

承澄・忠源は小川流、親守・清誉は三井寺、憲實は安居院流（三井寺定円と親密）、親瑜は、おそらく「実勝—親瑜—秀範—円海」の系譜に認められる親瑜か、と考える。

これに『法華文句』巻七版下担当「東寺門流金剛仏子源舜」という東寺門流を加え、その顔ぶれに宋了一・大宋人盧四郎（綱首などの周辺）という宋人の積極的な参画を認める。さらには、承澄を始め、時忠流などの関係者を複数指摘できる。「山上平家絵詞」の成立時期ともからみ興味深い<sup>注15</sup>が、今後の課題である。

文永から弘安・永仁・正安の頃にいたる「小川・白毫院（太子堂）・安居院・霊山、さらには鷲尾金山院など」の東山圏は、日本中世文学を考える上で大いに注目すべき地域

であり、宋からの舶載文物や宋人に親しい環境にあった。『七天狗絵詞』は、正にこの圏内に産まれ育まれた後、鈕阿の手によつて武蔵国金沢称名寺へ齎された。琵琶湖の東西に位置する天台談義所と学問寺の現存典籍が、金沢文庫現蔵典籍類と一部で関連してくるのも当然であったのである。

注1 福田栄次郎・湯浅治久・曾根原理・松本公一氏等

2 「閑居の友編纂の一資料」（『復刊』書誌学）新26・27  
合併号 1981・5）

3 牧野「『閑居友』をめぐる周辺資料—『円海』をめぐる一資料について—」（『実践国文学』75号 2009・

3）  
4 「園城寺伝来の『宝秘記』について」（『園城寺文書』第七巻所収）

5 松本郁代氏第9章「九条道家と真言密教」（『中世王権と即位灌頂』2005・12森話社）、牧野「慶政と聖徳太子信仰—宋版一切経補刻事業を軸に—」（『仏教史学研究』50巻1号 2007・11）、近く予定している口頭発表でふれる（慶政や頼賢など、延慶本と天狗）が、道家の構想の方向性を考えるに、律・密・浄土などの宋風を打ち出したもので、南宋の仏教が強く意識されていた

- か、と推測される。原田正俊氏「九条道家の東福寺と円爾」〔季刊日本思想史〕68号 2006・4)、大塚紀弘氏「中世禅律仏教論」(2009・10 山川出版社) 参照。
- 6 「阿婆縛抄をめぐる二、三の問題」〔仏教芸術〕一一二、1977)
- 7 松本公一氏「阿婆縛抄」の書写と伝播」(説話文学研究)、同氏「阿婆縛抄」を中心にみる中世天台教学(穴太西山流)の伝播について」(海を渡る天台文化)2008・12勉誠出版) ほか。
- 8 牧野「延慶本『平家物語』における「東山鷲尾」の注釈的研究」(説話論集)十一集 2002・8 清文堂)、「補遺三題——漢代画像石における「蒲輪」・「良含——遍融—円光」と白毫院・弘仁官符——」(実践国文学)75号 2009・3) ほか。
- 9 柴佳代乃氏「書写山の秘説をめぐる」(季刊『文学』10巻2号 1999・4)。注11参照。
- 10 牧野「十二世紀末期の日本舶載大蔵経から奮然将来大蔵経をのぞむ」(海を渡る天台文化)2008・12勉誠出版)、大谷由香氏「新出資料 金剛輪寺蔵 知礼述『観音玄義科』」(南都仏教)92号 2008)、牧野「中世前期学僧と近世書写—寺院縁起をめぐる二、三の問題—意教上人頼賢を軸に」(実践国文学)76号
- 2009・10)、野口実氏「東国出身僧の在京活動と入宋・渡元—武士論の視点から—」(鎌倉遺文研究)25号 2010・4)
- 11 久保田淳氏「法印清誉について」(『中世の文学』附録221994)、藤本孝一氏「三井寺本『真観本』(三)」(『冷泉家時雨亭叢書 月報79』2008・2)。「書写山」と『野守鏡』については、福田秀一氏「中世和歌史の研究」(昭和47・3 角川書店)、柴佳世乃氏「説経道」と書写山」(『芸能の中世』二〇〇〇 吉川弘文館)、清水真澄氏「説経の世界」(二〇〇一 吉川弘文館)など参照。
- 12 山崎誠氏「三井寺流唱導遺響—「拾珠抄」を遶って—」(『中世学問史の基底と展開』1993年・2月 和泉書院)
- 13 叡山版の問題については、西山寶菩提院との関連で近く口頭発表予定。
- 14 『昭和現存天台書籍目録』による。  
承澄—『法華玄義』巻一・二版下  
宋了—『法華玄義』巻六版下、『法華玄義釈籤』巻十版下、『法華文句』巻三・四版下、『法華文句記』巻二・四本・七・八本末・九本末・十版下  
親守—『法華玄義』巻七版下、『法華玄義釈籤』巻七版下

忠源―『法華玄義』卷五願主?、『法華玄義積籤』卷五願主

大宋人盧四郎―『法華玄義積籤』卷六版下

清譽―『法華玄義積籤』卷八版下

憲實―『法華玄義積籤』卷九版下

親瑤―『法華文句記』卷六版下

ほか

15 落合博志氏「鎌倉末期における『平家物語』享受資料の一、二」(『軍記と語り物』27号 1991)。

### 〈補記〉

宋人「智恵」について「新知見」を既に紹介した(牧野「集古会会員と中世典籍類の蒐集・継承について」(『実践国文学』78号、平成22年10月)が、「於南部一骨董舖求之」と肩附注記して「円覚経略疏之鈔第一之二」一冊を著録した『随神屋所藏目録』は、在九州福岡の集古会会員江藤正澄の蒐集した古写善本の目録である。詳細は譲るが、「円覚経略疏之鈔第一之二」の江藤の注記に「奥書云」として「永仁參年乙未五月十四日書写之畢執筆宋閩杭州路仁私(和か)縣居人智恵之」とある。納富・横内両氏指摘のごとく、この宋人智恵が書写に係わった『華嚴演義鈔』残十九卷三十三冊(卷十五・下・尾に智恵書写の奥書)には、卷十一・下の尾に「永仁三年乙未十一月九日於泉州久米多寺書写畢／執筆大唐国行在臨安府小堰門保安橋

居洪三官人書一校了」ともあり、洪三官人と智恵が書写していたことが知られる。この二人の宋人が同一人物の可能性も否定できないが、出家して「宋閩杭州路仁和縣居人智恵」と号した後に「大唐国行在臨安府小堰門保安橋居洪三官人」と俗名を用いたと考慮せざるをえないことになり、別人の可能性も強い。仮に別人として、同筆とも見紛う宋風の秀勁な書風は、むしろ極めて均質な個性を消した筆致の頭れとも云いえよう。また、「洪三官人」の「官人」を試みに南宋の出版関連の語彙に拾うと臨安府の版元関連に「衆安橋南賈官人經書印」などもある。敢えて云うならば、日宋にわたる出版の問題へ展開する側面もあろうか。これらの問題についての詳細は、別稿に譲る。

同じく前号78号に紹介した江藤正澄自筆『随神屋所藏目録』に著録された一点「法集経卷第六 一折」について附記し、前々号77号の一部を訂正しておく。『法集経』巻第六の印造記として記述された「陳全印造」印は、印面の同異の検討を残すのが、同名の刷手の開元寺版が知恩院藏宋版大藏経や中尊寺藏大藏経などに認められるのである。仮に同一人の印造記とすれば、刷印時期は中尊寺藏大藏経の思溪版の奉納識語(吉祥院)に基づく施入時期を遙かに下るものとなり、開元寺版は思溪版施入以降の欠帖を補う過程での補配となる。詳細な検討の後に確

定したいと考える。  
尚々、トロント大会発表時の英文原稿では、東山白毫院・小川・靈山の地域が宋代の同時代北東アジアに直結していたこと

を述べて了えた。いわゆる叡山版への宋代の人々の“版下”参加にとどまらない参画なのであり、靈山院の一堂は、宋人の寄進に係る建造物であったことも併せ考えるべき十三世紀の看過し難い重要な一事実である。以上の点については、別稿に譲る。

(まきの かずお・実践女子大学教授)